

辯道書

辯道書

□ 13
3074

門 口 13
發 3074
卷

辯道書

書肆嵩山房開板

辯道書

太宰純

儒佛神道の同異を論ずる而不辯の不足暗に解
 してとて事繁多して逐一に記憶するがごと
 く又疑惑起りて難義に在る純平日
 講辯の趣を要く紙上を記し月日然る少の
 取を其意の先を公常に仰い聖徳を
 言に儒仙外乃い鼎の三足の如くなり
 けり甚るるごとく其の不足とやまた
 一つ成る

辛道書

ゆき事の喻めたるを子に伝ふて少くも佛の成す
思ひも心儀なりと對せしははるりてその神乃成
一つの道にまゐる事の後世に起りて太子の内小無
りやと云ふ然るに神乃をなく儒佛は二道にまゐ
る乃ち其の二道の如くまゐるに無く叶ふ地と
清くも俗くもたゞしくいふまゐるを多に出づ家法くも
處りて從ひ清くもたゞしき下関に答へり
にく建武と云ふはあきくくはあきくくはあきくく
先 本朝は古く考ゆ 神武天皇より三十一代欽明

天皇の比まで、本朝の道といふ事あるは美事な
くもいふに三十一代用明天皇は皇太子に
聰明なる人生れぬは美事な事なりとありて三十一代
推古天皇は時移政の便なる事と云ふは美事な事なり
を制し禮樂法を興へて國を治め民を安んず文明の化
成天下に於てたゞしい 本朝は古く美事なり
の事と云ふべき人ありては聖徳太子と云ふは
あきくもあきくもあきくもあきくもあきくもあきくも
を儒に教へしは美事なりと云ふは美事なり

お家も皆神の示る所と奉祀の造化是より起り是を
 以て成就す所成天の神なる事山聖人以神道設教
 とは吾人の爲に何れと云成奉^{ホウ}ト一祖^{ソウ}乃命成文
 て初いひされば古の天皇天下統治する一々天地也
 川社櫻宗廟^{ニギハヤヒノミヤ}を祭成主^{ナリヌシ}人ト稱祠祭祀去て鬼神小
 供之民乃高にも成礼^{マツル}也第成禮毛卜筮^{ウラナヒ}一々疑を便
 するが如き凡何事乎中も鬼神と認ふ^{タテマツ}下成主と一山八人
 事成主一山八人とは鬼神之別成主とく^{サカスガ}を成主
 山人^{ヤマノヒト}なり又土居^{ツチイ}等と云行成主とて初いひを無民

此愚昧なる者ありて其事不疑慮おわさぬに鬼神を假
 と教學せざるは主心一定志づくるに聖人は成る
 めしてたゞも民を導くには必ず帝神明を稱え號令
 張出さるは聖人の神なりといふ聖人以神道設教なり
 是れも近世理学が流に流れていふに神道設教なり鬼
 神不惑なり云々といふと一々に鬼神を破り或は
 聖人の民を導く術として偽る鬼神を説くといふは帝神
 なるを以て主心とていふ君子之畏の第一なり畏天命
 と孔子は終る神ありて命は天の神なりといふ人智を以て

測らぬものなり。君子は深き思ひを以て周易の繫辭に
 陰陽不測之謂神といひ説卦に神也者妙萬物
 而為之者也といふ。皆鬼神の妙ありて測らぬこと
 致遠きこと神を其の命鬼神乃其のたひ何處理何の
 故ありて其の深き人もなきものなり。思ひを以て教ふこと
 外れしむるに下民を教ふ事ふもはたそ少しも其の
 欺る方便ある鬼神を以て其のたひに教ふこと其の義を
 理學といふは知る所あるに非ざる。此の勸諭はこれなり
 公のたひに神を以て神なる實ある聖人の道の中に在る

聖人の乃に外に別有神道とて一つはたあること
 なること。世に神なるものいふは法に儒ものなるを以て
 是と建立するなる物ありては建立するも其の佛は法
 りて後其の事いふこと其の古田家の先代に於て兼俱するに
 おはるものなり。是を以て兼俱する神職の家よりいふは不
 老長生ありてはたて美しき思ひ。其の神の巫祝のなる
 法もそのを以て七八分の法はふこと其の儒道は配
 割して一程の道を造りかゝるものなり。牽強傅會に
 り物ありては聖德太子の時決定してあること。此の事いふ

尸位を是よりいはるるを其時ふるを事にあはる
 今の神乃に神より其のいし給加特なりは其後授
 くるま言家の何國梨護摩師の如くする業を教ふ
 是巫祝の道めて神乃に肝要をいふは巫祝といふを
 鬼神に給事するをふと國家ふるて叶はるる
 巫小周禮の春官に大祝小祝喪祝甸祝詛祝司
 巫男巫女巫乃官あるを鬼神の事候るを司此
 諸友を是より其家社稷以下に祭祀を其玉家の大
 礼に皆それくの職事ありて其役を給はは事ハ

只専鬼神小給事——祭祀新禮儀のふのふと
 別にも其所の其家にお傳ふ候て其國乃代の巫
 祝の所作いふなり神といふは其を考ふ處を其に
 其のふも大略今此母の何國梨護摩師祿臣神主
 神子山伏るもの所作いふる候て其ふくは其今こ
 時を異ふ——異國を 牛執と候は隔つる故ふを儀
 式名目ばかりくは其を本作いふのと大に異なること
 有る——其の事細ら人情抄裡古今同形なり故ふに
 巫祝のふら其子れ道はにおなり候て其ふあり

ありては人々もバツ裁りぬるなりと悟りて一事も
おろしき事とありては左衛門の害にあらぬなり其
まうに捨置る神より種類をば彼等に任せんて左の
天皇明王と号は用なきに而官の列に入らん後世
より人々性なる振るなりなりと西門教なり
者なり是を治はは先王に於ては振るなりなり
まば巫祝より別し一様の事ありて常は道なりなり
祓常の人より祓常なりなり何の用にもあらんや今人神
なるを夢むく不浄なる家の内不神壇を作り不浄なる

衣服を著し不浄なる依りて祓常なりなり
なり巫祝れぬの行ひをかりて鬼神不穢き鬼
神を清めて終ふは乳する老より今神神乃家
ふより来れ神明を佛家にいふ如きなり公の神明を
いふは仙家なり心心の係りて如き如き如き根の
國底に在るなり死しては是事なりふより公の内
清浄六根清浄なりなりなり仙家不煩悩を清て善
提提求るなりなり公に六根清浄なりなり法華經不
出の神道家に在るなり自代竊く教は立るなり物なり

想じて今神なるを唯一三元堂のどと名ふ
あなづきと杖撰ヅザンを著しなり故に佛道三敵ミテ
す類をうき肉は一被イッヂせしれ神乃の如く
事申さるべき所なり故に其の記録カキ然る低
の中にもては是めと云ふ此神道のいふだ
有るやうに法法の公けりあるにやみぬ神乃
といふ文字は周易にかゝる聖人の道の中に一爻不
変の成るをあたひ巫祝の力を神となしむと王公大
人より士農工商に至るまで其の好まざる多きは

大なる誤りといひの介の辭事には巫祝は乃ち鬼
 神に給ふ事するのみと云人忠身を修め家國治民
 國を治めたり成治むる道といふは之を巫祝にあ
 げりとは知れども少くも事かけずいふは士君子
 學ぶべき事なりといふと思へば家國の中華あり
 周穆代の末に雲崔が盛にけりといふ孔子は之を
 ぞとにけり——即ち之をいふは孔子儒墨と稱し
 之は墨氏の道也といふ漢の代に董光乃道也とい
 黄老といふは之をいふは其の道也といふ

古乃高帝を祀しと云ふは漢の初より
 仏法中未だ入て世にまゐり一教に於ては後ハ孔
 子ヲ道ニ釋者老庄を並べ儒釋道と稱しハ道と
 云ふは老子ハ教を道教と云ふは儒教道と云ふ
 けりハ三教をいふ事なりは乃教ハ孔子也近來神乃
 世にけりハ神と云ふは我國の道ニある神なるを巫祝を
 傳ふ事なりハ極く小なるなりと云ふを人知くは儒ハ
 神道也と云ふは神の道神ハ日本の神なりハハ道ハ
 天皇の如く國を治むる倫理なりと云ふなりと云ふは

北へさき事くくは佛道ハ釈迦の教めてハ釋迦王
 天竺摩竭陀國乃淨飯王くく王女王子くく幼少
 時ハ悉達王ハ耶輸多羅王ハ女人を妻とくく
 羅睺羅くく王女くくハ年十九くく發心出家
 父王を夢見るハ國王の太子にくく王位継ぐ人なる
 是代獻ハ父母をも妻子をも棄てハ家遁世とくく
 人間ハ形をも代極格ハくくにいとくく一ハ自生
 せんハ世を浮世の苦歎を痛苦に思ひて是
 を離れくくハ一ハ世安樂にせんハない付るわやい

出家とは父母を家法せし山棲に日月を浮雲流水
 の如くあきらめやの釋迦の心を著ぶるは依りての釈迦
 志道ハ國王の位を棄てて月一つふたつする所ありて
 けり成修する志と士農工商の業を棄てての上にあたり
 下に居るけり然るを志とて其の既ハ父母の教を承
 け父母なり一書成其志もバ子なり一是父を志とす其の志
 を以男女れ更りり其の志を夫婦に以ておきて其の父母
 形も其れを兄弟と其の世に離れて人國の更りり其の志
 ハ朋友といふを其の志を志とす其の志を志とす其の志
 ハ衣食

飯のむき振りに飯を食ふ事とて、
 只今のも丐人の如く食を人に廻して
 家なく食物をも作らねばなる故に苦
 とけり又此の志ありて新しき合
 鉢中の食物其日余をつかひて
 俵にこめて食成食をくゆる又その
 衣を着ては、
 凡病人死に産婦に産後を治す物

其外何れも汚る事有る所衣服をば持て、糞壤
 に棄て置りし所へ就て去る人、糞壤を棄て置る所へ就て
 帛を拾ひて、油と臭角水とを洗ひ淨めて、綿繡綾
 羅布帛の類なり、種々の物、綴り集て、袷袢に作
 る。或は糞穢衣とて、被衣とも、人の棄て置る物とて、糞穢
 物なり、或は、傷れた衣服、或は、是れ衣上第一の法、服と書い
 糞壤を棄て置る所へ就て拾ひて、袷袢に作りし、或は、餘
 の衣服、勿論、或は、汚れた衣服、或は、定めて、或は、樹の陰、樹
 の下、或は、風に吹かれ、或は、草に生え、或は、空に飛べし、只

心を清くして、
 道に就いては、
 心と肝要に當る人の情欲を殺すの法も、
 中に執る貪欲瞋恚愚癡之毒を去る。眼耳鼻舌身意を六
 根と名づけ、色聲香味觸法を六塵と名づけ、六塵は物
 と爲すものなり。然にも多き味觸法の象づゝ根は汚穢
 取捨喻とて六塵と名づけ、六塵の外より我れ遇ふ
 外境界なり。教へずば外境とて、儒家として、新

西事之少は家も財もなければ火盗賊に思

事乃妄念妄想
凡一切事
皆由心造
心若定則
事自平矣

静シヅカむむををおおひひのの時トキ後ノチにに移シるるのの法ホウありあり數スウ息ソク觀カンとといいふふ
静シヅカ家カににああららししめめてて呼コ吸キツのの息イキをを觀ミるる息イキをを數スウふふたたららばば
何ナニとといいふふ放ハナツ逸イツせせばば忘ワスレ念ネン起キるるももいい不フ淨ジヤウ觀カンややいいふふ人ヒトのの身ミ乃ハ
不フ淨ジヤウなりなりとといいふふ人ヒト不フ淨ジヤウとといいふふ人ヒトのの身ミ乃ハ
九ク相サウのの持チいいをを詠エイじじたたるるああららししめめてていいふふ觀カン念ネンハハ男オウ女ニョ好コウとといいふふ
をを餘ヨリんん乃ハににああららししめめてていいふふ月グハツ輪リン觀カンとといいふふ胃イ不フ光クワウ
明メイ圓エン滿マンのの月グハツ輪リンをを觀ミてて見ミるる靜シヅカとといいふふ觀カン念ネンとといいふふ是コノ乃ハ人ヒトのの身ミ
のの身ミ乃ハににああららししめめてていいふふ月グハツ輪リン觀カンとといいふふ胃イ不フ光クワウ
物モノハハ月グハツ輪リンをを胃イのの前マエににああららししめめてていいふふ後ノチハハ胸キョウ中チュウにに

入イるる身ミ乃ハににああららししめめてていいふふ月グハツ輪リン觀カンとといいふふ胃イ不フ光クワウ
觀ミのの功コウ積シユりりてて後ノチハハ暗アン中チュウにに燈トウががくくとといいふふ光クワウ不フ淨ジヤウとといいふふ
アアとといいふふ水スイ想ソウ觀カンとといいふふ胃イ不フ光クワウ
ああららししめめてていいふふ人ヒトのの身ミ乃ハににああららししめめてていいふふ地チ水スイ火カ風フウ
のの身ミ乃ハににああららししめめてていいふふ人ヒトのの身ミ乃ハににああららししめめてていいふふ地チ水スイ火カ風フウ
大ダイ空クウににああららししめめてていいふふ人ヒトのの身ミ乃ハににああららししめめてていいふふ地チ水スイ火カ風フウ
静シヅカをを觀ミるる觀ミのの功コウ積シユりりてて後ノチハハ暗アン中チュウにに燈トウががくくとといいふふ光クワウ不フ淨ジヤウとといいふふ
小コ静シヅカとといいふふ法ホウありありはは皆ミナ人ヒトのの身ミ乃ハににああららししめめてていいふふ地チ水スイ火カ風フウ
明メイ燈トウをを掃スイ除ジョとといいふふ法ホウありありはは皆ミナ人ヒトのの身ミ乃ハににああららししめめてていいふふ地チ水スイ火カ風フウ

極く一に佛なるは只此一に成明の道あり人に
教ふるも其人の一に成明の道あり人に佛は
一も大衆小衆五時八教を説くも一に成明の道
あり佛は此法を演説せしに後衆の祖師も
依て釋くの宗門を立て世の人成教導し一に成明の道
あり法宗も教法を説くも一に成明の道あり法
あり説の二にて一に成明の道あり法宗の教は
一に成明の道あり佛の教は一に成明の道あり
一に成明の道あり佛の教は一に成明の道あり
一に成明の道あり佛の教は一に成明の道あり

教を世に傳ふて一に成明の道あり人に
教ふるも其人の一に成明の道あり人に佛は
一も大衆小衆五時八教を説くも一に成明の道
あり佛は此法を演説せしに後衆の祖師も
依て釋くの宗門を立て世の人成教導し一に成明の道
あり法宗も教法を説くも一に成明の道あり法
あり説の二にて一に成明の道あり法宗の教は
一に成明の道あり佛の教は一に成明の道あり
一に成明の道あり佛の教は一に成明の道あり

を獨りの方に治むと物多くい今獨り治るを先
王に王に治る道ある同等にはいふ大なる治
誤りては歎氏の及も乞食す處に正命會と一士農工
商は果成か一と外にわが産業を形とて後世まで
邦令會と一の善善の事八戒の中に初命書戒を
うけ是は禁めざるものなりは治は乞食等拓許
して法を執る城市なりと米穀を治るを飯を炊
と食ひは釋迦の法に乞食と熟食を炊くを飯會
換めく飯炊くといふを許すは乞食の衣服を糞糞に

を多きものなるに今世僧は衾被褥を多しといふ穴
小僧一樹下に上りて坐すもまた乞食の寺に小
僧一僮僕を名使ひ採果汲水の勞減せしむるに
を多し中より大刹に住する富者の僧は衣食奉
養車馬僕從皆世に王公貴人小僧して榮耀に極
むるもの振目成勢ものといふかやうに末世の僧は佛
法の本意を忘る僧人異なりなり状をかりしは
自己に乞食を思ふなり乞食を佛より乞食は今の
僧侶は皆乞食を乞食するに乞食するを乞食は

君臣といふは尊卑に今も俗儒は一もれ位持ふあり
以て奴僕を名づるは天子の位持ふ数多の僕従を高い
く仰ぐ士大夫國君の儀式を備へたる被令たる君
を乃ては佛法ふんずるものあるは尊卑に今も俗儒
を中へ成はし嗣といふ法を授くるを嗣法といふ法を血
脈といふ法を父に準じざるあるは尊卑に今も俗儒
しるは如く是を尊卑とせざる人たるは天子の子をせする
が如く寺を講り財寶を成講ると世の人乃て田宅家産を
講るは如くは如く是を令く父子は道めくは父子は

中へ是を尊卑に今も俗儒は一もれ位持ふあり
以て奴僕を名づるは天子の位持ふ数多の僕従を高い
く仰ぐ士大夫國君の儀式を備へたる被令たる君
を乃ては佛法ふんずるものあるは尊卑に今も俗儒
を中へ成はし嗣といふ法を授くるを嗣法といふ法を血
脈といふ法を父に準じざるあるは尊卑に今も俗儒
しるは如く是を尊卑とせざる人たるは天子の子をせする
が如く寺を講り財寶を成講ると世の人乃て田宅家産を
講るは如くは如く是を令く父子は道めくは父子は

是すかいつち天地の道ぬき人少と私意成かへるふ
しは空の道成同くといふ道なき野山へ始と成
界を振る物にふいふ日本のは山小若役小角が道
成開きといふをくれ人なる成振る其山はは来し
いお小近きなり易と換るなりといふも近
き乃易と道成のいふをいふは初よりなる事
く害にわいひ只若の達人の并たる成行いふ近遠
が振る物も危きあやしく迷ふもよくあはれに
住まふいふあやかりた役小角は世の靈智あて成

と知る後人の爲に真なる成振るなり教ふといふ人
をかく聰明睿智成いふと地味物の程を知り天下に
わたりなり不易の道を開きたるいふ想とくと地開開
初ふ人のいふなる本に之を成池に魚乃生と腐る物に
成生すなりいふ人の氣化して生するなりあはれなる
なり其時乃人なる成上下れ果るなりなりなりなり
是成平民なりなりなりなりなりなりなりなりなりなり
男女一なりなりなりなりなりなりなりなりなりなり
なりなりなりなりなりなりなりなりなりなりなりなり

け、然明睿者、仁徳乃多、其の人、故、人、も、い、け、聖人、上、に
 立、て、て、下、れ、人、を、仰、ぐ、れ、る、も、一、代、天、子、と、稱、し、大、君、と、申、し、た、
 天下の人、皆、仰、ぐ、て、い、是、君、臣、の、始、と、て、い、上、に、大、君、阿、れ、下、
 も、亦、大、小、の、別、く、小、君、長、を、立、て、其、下、を、治、む、皆、悉、に、
 の、道、と、て、い、人、も、父、母、が、と、孝、は、多、く、い、禽、獸、ハ、乳、哺、の、ま、り、
 亦、母、を、慕、ふ、の、こ、ろ、く、少、長、と、て、離、別、と、れ、を、就、ハ、
 子、成、立、と、い、は、親、を、忘、ふ、後、必、親、と、ま、や、合、成、事、と、い、
 人、も、本、ハ、柔、然、の、如、く、お、ろ、ろ、を、守、人、是、に、親、愛、の、情、
 示、し、孝、教、を、な、す、故、教、を、由、い、と、う、り、父、子、の、道、始、り、い、

東就^{イウ}子^{オホトリ}同^{オホトリ}産^{オホトリ}交^{オホトリ}合^{オホトリ}を^{オホトリ}て^{オホトリ}子^{オホトリ}成^{オホトリ}生^{オホトリ}を^{オホトリ}い^{オホトリ}人^{オホトリ}も^{オホトリ}本^{オホトリ}不^{オホトリ}あ^{オホトリ}就^{オホトリ}の^{オホトリ}如^{オホトリ}
 け^{オホトリ}り^{オホトリ}一^{オホトリ}を^{オホトリ}全^{オホトリ}人^{オホトリ}婚^{オホトリ}姻^{オホトリ}の^{オホトリ}禮^{オホトリ}を^{オホトリ}制^{オホトリ}一^{オホトリ}男^{オホトリ}女^{オホトリ}の^{オホトリ}別^{オホトリ}成^{オホトリ}を^{オホトリ}
 淫^{イン}私^シ成^シ禁^シど^シ一^シ本^シい^シる^シり^シ夫^フ婦^フの^フ乃^フ婚^フり^フい^フあ^フ就^フは^フ
 同^{ドウ}産^{サン}の^{サン}數^{スウ}あ^{スウ}れ^{スウ}る^{スウ}兄^{ケイ}弟^{テイ}の^{テイ}あ^{テイ}る^{テイ}一^{テイ}人^{テイ}も^{テイ}本^{テイ}
 禽^{キン}獸^{ジュ}の^{ジュ}如^{ジュ}く^{ジュ}同^{ドウ}産^{サン}の^{サン}い^{サン}る^{サン}兄^{ケイ}弟^{テイ}の^{テイ}あ^{テイ}る^{テイ}一^{テイ}人^{テイ}も^{テイ}本^{テイ}
 一^{イチ}年^{ネン}開^{カイ}を^{カイ}お^{カイ}殺^{カイ}す^{カイ}を^{カイ}い^{カイ}る^{カイ}一^{カイ}に^{カイ}を^{カイ}人^{カイ}あ^{カイ}る^{カイ}を^{カイ}憂^ウへ^ウる^ウ
 幼^{ユウ}乃^{ノウ}節^{セツ}を^{セツ}制^{セツ}一^{セツ}兄^{ケイ}弟^{テイ}の^{テイ}乃^{ノウ}成^{セイ}立^リの^リ禽^{キン}獸^{ジュ}の^{ジュ}如^{ジュ}く^{ジュ}あ^{ジュ}る^{ジュ}一^{イチ}人^{イチ}も^{イチ}本^{イチ}
 一^{イチ}に^{イチ}一^{イチ}人^{イチ}も^{イチ}本^{イチ}不^{イチ}あ^{イチ}就^{イチ}の^{イチ}如^{イチ}く^{イチ}い^{イチ}る^{イチ}一^{イチ}を^{イチ}相^{サウ}争^{シュウ}

事と人との間に物成ることをいふに少くも善と物を
 少くも多しゆとて思ひ夏は暑く冬は寒くさやあ居
 たりといふその如きことばは過ちりやうに居るが如きは皆
 争ひといひて成るなりと成るなりと推のけてを利と
 害とにひくは我く何れを人と亦然なり人とか
 のごとくなれど争奪の事起りて人なれれども時
 が一と是とあつて争奪ののむとていふ人とは成る
 神といふも成るなりと成るなりといふ人とは成るなり
 して争が事妻女といふも人の婦女を利と利と争

ありて制して夏を涼と冬を人を居るを冬を涼と過ち
 たりと人を居るなりと成るなりと推のけてを利といひ
 礼と義と人との教とて人の心と元来具する物とては
 冬の上古の民は冬を涼と冬を涼と成るなりと成るなり
 と成るなりといひて人を居るなりと成るなりと推のけて
 たりと人を居るなりと成るなりと成るなりと成るなり
 然る後を物といふと衆人の中にある物ののひをなれど
 たりと人を居るなりと成るなりと成るなりと成るなり
 人の教と礼義と人との教といふ物成るなりと成るなり

よくいひ被るの教いられくも人同れれをて天下治
り黎民あくなりい民をありもかば仁をい仁人
の徳よくい盤古燧人い地開闢の初なる人よくい後伏
義神農帝と二帝よくい少昊顓頊帝嚳帝堯帝舜
及び帝よくい三帝五帝は皆聖人よくい天下はありよくい統
るに三皇よくい帝は帝堯までい世のいよくい統
治るるあり聖人の智徳用をよくい本氏のいよくい統
治を治さる食乃事を授け器物を作り初めは利
てむすすい民を治るるあり初めは治るるありとて堯

舜の時よくい養育の具よくい略成就よくい事事終制
よくい事事終りよくい堯舜聖帝よくい多かれを
よくい人臣よくい友人よくい朝廷よくい會議よくい
事事の制度よくい事事はよくい是よりよくい治る民を安
くするに大いに用ありよくい世の大はよくい利い其後夏
殷周二代のうまも皆堯舜の道に師よくい天下は
治るるい時代の移るに治るる少くは益よくいい
に治るるよくい治るるをいよくい治るるよくい治るる
いを治るるい黎民はよくい治るるよくい治るるよくい

人忠心を信物ありて静ふ志ありて物ありて静ふ人とすれば
 信物ありて信人こそ是れは沙汰まじきものなりとすれば動も
 人静めんとすれども動もいかに一つなりては信と動に
 こゝろを分てん誠信ありて決意ありて静ふ事ありて信人
 を守るがすなりとしかれどもては静めんとすれども動も
 ありていかに小児の如くありて静ふこと小児は何れども
 善く信物持てて静ふことありて誠信ありて明誠ありて
 信物ありて静ふことありて静ふことありて静ふことありて
 信物ありて静ふことありて静ふことありて静ふことありて

りんこもこれに必^{イカ}然^{イカ}り啼^{ナク}と辱^ハまばいりまは又^ナ泣^ナくおさ
 へぬを後^ノは病^ヤ成^ルたういふをもかく去^サ慮^{リヨ}の記
 録^キを心^{ココロ}の役^{ヤク}でいひつたに妄^{マウ}念^{エン}妄^{マウ}想^{ソウ}と名^ナづけて是
 を制^{セイ}し制^{セイ}をく制^{セイ}せしぬ拙^{セツ}を強^{キヤウ}く制^{セイ}もれを
 後^ノはふに解^{クセ}法^{ホフ}をて病^ヤふかるも是^{コノ}成^シ必^{イカ}疾^{イキ}とゆひ
 うは世^ヨの中^{ナカ}に如^{ニホウ}を研^{ケン}之^シ目^メ夜^ヤまし終^{シュウ}に粗^ソ
 能^ニく病^ヤ人^{ニン}をわく老^{ロウ}くする人^{ニン}成^セ攻^{コウ}る能^ニく綱^{コウ}
 あくは小^コの城^{シヨウ}攻^{コウ}て病^ヤをあずるも同^{ドウ}輩^{バイ}にあひ堂^{ドウ}人^{ニン}
 の数^{スウ}は拙^{セツ}を家^ケとくしんはるは沙^{シャ}はせず山^{サン}書^{ショ}

儒の心法は佛道をもちては仕撰あるに拘りては根本に似
せぬを以て故に仙方の正統なるふ及びもの想しなくはせむ
也セイヤ一不修ありては精しと物にては佛道は五千餘あるの
理端に移るゝの法成程に移るゝの教成支那を法とする本
は心法成研ミカくより外は事無き心法に依りて心法を辨し
て精微を求むるに毫釐と違ふは是を奇妙なる事
あるものなり。秋氏の教下任て心法を研さばは心法成開
くものなり。只此の心法一つをあらうとするを以て士農工商
を以て補ツキなく増ミて天下國家の爲に何の益も無く

之を畢竟其用の教ふといふ是の乃はん誠治るを
 を教へるは禮義をもちて心むのなり治るは學
 同く孔子の教に依り先王の道を學べしは家方一
 代治るより天下を家と治るに重きと何れも思ふ
 と其宗を公に治る一なり小治くは道は是れを
 稱するは不審なるに也程朱の乃を學のなり
 いはれ孔子を道に依り是を自に治るを法の稱
 而感ふは尤のなり是の程朱の乃を程朱の并た
 道なり孔子は乃をあらはれ孔子乃道は孔子は乃治

世に於ては後世まで傳へりし時之に日暮と螢
火燐火朽木を頼りて暮るは寂びたるが如くあるは
然るを漢乃代を先王に世をまゝと未きうに天あり
孔子の道と尊崇し一は又經の傳士を立ちて百家九流
を絶らし一に於て天下の人皆た道の非を知りし能くは
月夜夜は螢火の光かありたりしかるやあるは漢の末より
は中華にけりし南北朝を歴て天下に弘まり唐の代
よりまゝと盛なりし老子の道と漢の代より始て
けりしは唐の代より蓋あると天下に流布せり

佛法と並びし釋教乃二教の外に釋と乃をもたてて天
下け民を惑ひたり多うは唐の末より其の聲をば
アと時を教と螢火の光甚しき如くは日暮と
元來道といふと其の道は神乃代に説く者より
吾國の乃とて其の妙なる教ありしは唐の世といひ
きりしは漢の代にけりしは日暮と道といふと其の
仁義禮樂孝悌の字に和訓ありしは日本元來あり
る事ありは必和訓ありし和訓にけりしは元來あり
る事ありしは神教といふと其の神は

人を平代のはたして天子も兄弟叔姪夫婦にあらはれ
 けりあるを國と名づけし中も其のちる人のたゞ玉にけ
 りしとてそれあるは中も其のちる人のたゞ玉にけり
 礼を知らず人偏るるは是れ其のちる人のたゞ玉にけ
 今世の世に事あるは礼を知らず人偏るるは是れ其の
 中にも思ひし聖人の教乃及ぶやといひ日本のこの世に
 中にも思ひし聖人の教乃及ぶやといひ日本のこの世に
 治りしは其のちる人のたゞ玉にけり
 中にも思ひし聖人の教乃及ぶやといひ日本のこの世に

中に存するは其のちる人のたゞ玉にけり
 中にも思ひし聖人の教乃及ぶやといひ日本のこの世に
 中にも思ひし聖人の教乃及ぶやといひ日本のこの世に
 中にも思ひし聖人の教乃及ぶやといひ日本のこの世に
 中にも思ひし聖人の教乃及ぶやといひ日本のこの世に
 中にも思ひし聖人の教乃及ぶやといひ日本のこの世に
 中にも思ひし聖人の教乃及ぶやといひ日本のこの世に
 中にも思ひし聖人の教乃及ぶやといひ日本のこの世に
 中にも思ひし聖人の教乃及ぶやといひ日本のこの世に
 中にも思ひし聖人の教乃及ぶやといひ日本のこの世に

此も偏なるものなり人民ありては其の示すいふこと
さるるに其の業物と性の偏なることといふ偏るこれ
も病は治あることなり此の病に大毒小毒を毒を
おさふは多うれた病に接する偏るはかゝる偏るは
すねえと毒あることなり此の病に大毒小毒を毒を
人びとに治すは道とてよく先王の乃の弊する
時おとくおとくは一家の病を治す人吾別の見識なり
まは甚なることなりなまは早き時此世を治るべき
國家を治るべきを治るべきなり此の世に治るべき

捷徑チカミチ

捷徑なるものなり此の世に治るべき
らざる故一また利あることなり此の世に治るべき
いりひびくことなり此の世に治るべき
るためこの世に治るべきことなり此の世に治るべき
道なり此の世に治るべきことなり此の世に治るべき
は世に治るべきことなり此の世に治るべき
政事と治るべきことなり此の世に治るべき
中なるものなり此の世に治るべき
此の世に治るべきことなり此の世に治るべき

みくしやも穢義を犯し人傷け道を虧くハ一日も
たむん傷傷人あむ城解くるもろけて早も世介
方外ふあむる國家は法令に違ひ世間をれあけ
れしは是亦一日もあけの佛法は殺生を禁く
禁ずれども海魚の民は耕作をば魚を捕て産業とし
る所は甚も少む傷傷に於ては以て城禮し経を誦
し或は大法を誦し或は大般若經を轉讀するもて
功をすらし徳家を為し福徳なりとの漁家
神といは魚の多く集りし人捕らぬかとい

魚多く捕らぬまづは漁家の利をみて産業としなり
る浦にあらむかといは傷も傷ふ其殺生を文にせし
海魚に何れ傷をあたふ魚殺されども魚の殺されん
と歎祈るがごとくはたうと殺すと同様にそのあは甚後
の力あり殺生は禁むべき佛法の條にせむは海魚にも
魚乃集りし末にはあけの魚の多くあけの海魚の
民は皆産業を為し其の多しを早く日本の内にも東
西南北の海にこれ幾千の民ありて魚を捕りて食
ふ耕作をせざるも其食ふは其の父母を養ふ

少も子登と其を海師にまゝ付属不^レ在^ル佛^ノ屋^ヲカ
 儒者ハ諸子百家漢^ノ景帝^ノ時^ニ罷^{シテ}絶^ス
 其道を知^ラズ一^ノ策^ヲ取^リて之^ヲ行^フはば其^ノ法^ヲ
 惡むとも又諸子百家を誣^ムす利^ヲと爲^ス一^ノを信^スを
 人^ノ類^ノと何^ノの如^ク思^フふ下^ニ於^テ事^ヲ紙^ノ上^ニ佛^ノ
 法^ノ絶^スずハ國家は治^マる所^ナくもや其^ノ善^キ業^ヲ定^メ
 る先^ニ至^ルれ乃^チ成^ル明^ク、然^レも亦^モ上^ニ由^リりハ諸子百家の各々
 國家の病^ヲを治^スるも畏^リ業^ヲにして釋氏^ノ王^ノが如^クに
 もめも傳^ヘて古^ノ來^ニ巫祝^ノを數^ルるも若^シし其^ノ政^ヲたえ

王制は國家乃害ありと云ふ如く日本は神國又神
 小を道とて政教婦人等と何と云ふは早稲子百家
 と何れも神道も孝舜の乃政教を世に立と何と
 云ふは神を中善の古代と日本は今の世と云ふつと
 孝舜の乃と何れも神を百家を学ぶ者も何れも巫祝
 も孝舜の乃と云ふ王者の民あり王法の外不出方と何と
 云ふは國家政教の人孝舜の乃政教をばつと何れも神を
 何れも孝舜の乃と云ふ王者の民あり王法の外不出方と何と
 云ふは國家政教の人孝舜の乃政教をばつと何れも神を

を及^シ覆^フして所^シ便^ニの^ミる^ル所^ニ不^レ審^ニとい^フ再^ニ同^ニ然^ル所^ニ凡^レ此^ノ
 所^ニと^テ言^フふ^ル所^ニ先^ニ王^ノ法^ニ云^フに依^リて^テ孔子^ノの教^ニを述^ベぶ^ル
 胡^ハ亂^ルる^ル所^ニ何^レ一^ニに^テ論^ズず^ル事^ニ有^ルく^ル疑^ニ慮^ニを^テ
 止^ムむ^ル事^ニ細^ニく^ル辨^ズず^ル所^ニ有^ルく^ルい^ハふ^ル所^ニ有^ルく^ル云^フ

辨道書

書辨道書後

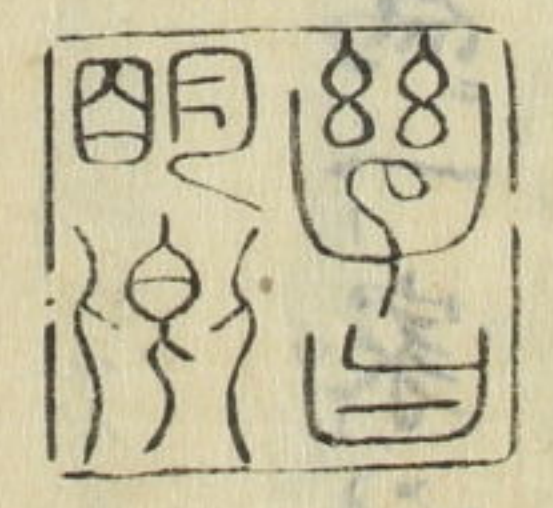
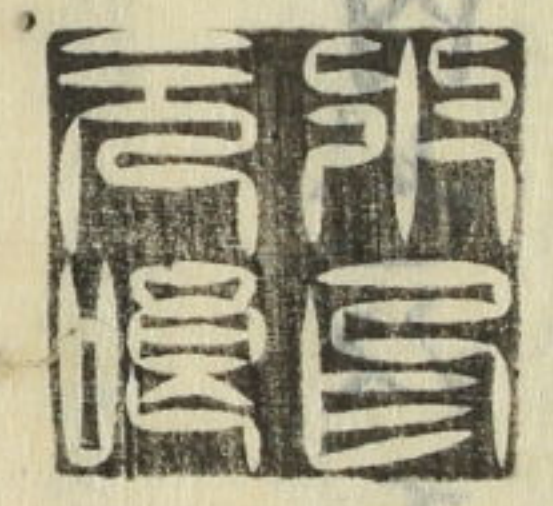
古先聖王統御宇内也。以天下為一家。以中國
 為一人。當是之時。車同軌。書同文。故異行者有
 誅。異言者有禁。道豈有辯邪。百家往而不反。人
 執其所見。家夸其所長。譬之耳目鼻口。不能相
 通。道豈無辯邪。蓋不得已也。春臺先生有嘗與
 入辨道書。書賈須延年。適見以為奇貨。可居。遂

請上木云。嗚乎。道之裂也。猶七國自王也。此書其終成秦政一統之勳歟。方今

昭代同文之治。興隸亦能解國字。則此書之行。其

必速於置郵而傳命哉。享保乙卯復月下浣

大泉莊內水野元朗書于東都神門邸



右辯道書。右宰沐大漢門撰。右所存。追付聖學同答。板行仕以



享保二十年乙卯十一月冬至日

江都 書肆嵩山房

須原屋新兵衛開板

義茂

朗

子